

ウルリム
響

星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第46号

2008年3月1日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

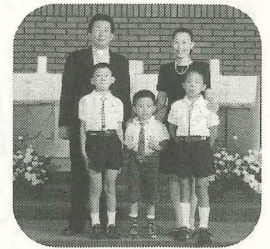
E-mail: ikuno@nskk.org

小さな出会いが積み重なって

任大彬

私はキリスト教の一派である日本聖公会（英国国教会の流れをもつ）の牧師です。昨年1月、私のいる大阪教区（日本聖公会には11の地域に分かれています）の在日韓国・朝鮮人と共に日本人クリスチャンとして宣教協働を行う委員会の会合に参加しました。会合後、聖公会生野センターの韓国語教室の生徒と息子さんが経営している韓国居酒屋で新年会をし、豚肉の焼肉、キムチ鍋等を美味しく頂きながら楽しい一時を過ごしました。料理をしてくださった生徒の金さんと互いに自己紹介する中、私が寺田町にある教会の牧師であると紹介したところ、ご本人もその教会を知っているし、息子たちが、教会が主体として行っているボーイスカウトに行ってお世話になったといわれ、互いにびっくりしました。金さんは在日コリアン2世で、アメリカに住んでいる弟を訪ねて旅行に行ったとき、入国審査時に言葉が通じなくて困った

とき、韓国語の通訳者が来たのだが、日本で生まれ育ったので、韓国語が分からず、日本語の通訳者をお願いしたという経験から、韓国語を学ば



なければと思い、聖公会生野センターの韓国語教室に通うことになったそうです。その後、わたしは教会の近くでもあるので、金さんのお店へちょくちょく行くようになりました。ハングルを熱心に勉強している金さんの願いもあって、金さんとハングルを学んでいるお友だちの要望で、教会で韓国語懇談会を毎週行うようになりました。韓国語懇談会には3人の在日コリアンと一人の日本人がこられていて、60代のメンバーの1人が以前、私が生まれ育った生野区勝山北の教会の近くに住んでおられ、お子さんがその教会の子ども会に通っていたという話を伺いました。その教会とは今の

聖公会生野センターが共にある聖ガブリエル教会で、1992年現在の生野区小路に再建された教会です。小さな出会いが積み重なる中、地域と教会と人とを結び合わせてくださっている神様のお働きを思い起こしながら、毎週皆さんとハングルに触れる機会を楽しみながら過ごしています。

（いむ てびん 司祭 大阪聖愛教会牧師）

もくじ

小さな出会いが積み重なって/1

時のしるし「人が辱められることは神の名が損われること」/2

多民族・多文化共生のすすめ いるのに、いない～軽視される外国人住民~/3

濟州島四・三事件と在日/4

韓国・李明博次期政権の行方/5

写真 聖公会生野センター フォトギャラリー/6・7

韓国からのお便り キムジャン大作戦/8

速報 聖公会生野センターは移転します/9

こんな本あります 尹東柱『空と風と星と詩』/10

詩『統一後』/11

編集委員リレーエッセイ・余韻/12

「私は今月、中国での中日友好活動を終えて関西空港から再入国した。指紋採取のため両手の人さし指をそろえたとき、かつての指紋押捺の、あのいまわしい屈辱感に襲われた。日本は私を育ててくれた国であり、暮らしの場でもある。この国の人々のために役立ちたいと思ってきたのに、なぜこんな目にあわされるのか。裏切られ、傷ついた。」

これは在日中国人2世で元化学技術者の林伯耀^{リンボーヤウ}氏の言葉である（朝日新聞「私の視点」欄、「新入国審査——『テロ対策』が生み出す分断」2007年12月25日）。

昨年11月20日から日本に入国、再入国する外国人に、指紋採取と顔写真撮影が義務づけられた。旧植民地出身者とその子孫である「特別永住者」などは除かれているが、しかし日本での永住許可を得た「一般永住者」である外国人にはこれが適用されている。

具体的に言えば、たとえば私の高校時代の同級生の韓国人はこの義務を負わない。しかし20年来の韓国の友人は日本に来るたびに指紋と顔写真を取られる。今、一緒に本の編集をしている在日の牧師、研究者も、大韓聖公会から来て日本聖公会の中で働いておられる何人もの宣教師（宣教協働者）とその家族も、韓国を往復するたびに、あるいは他の国に出かけるたびに、これを強制されるのである。

法務省入国管理局はこう説明している。

- Q. どうして入国審査の時に指紋、顔写真を提供しなければならないのですか？
- A. 指紋、顔写真という個人識別情報を利用して、別人の旅券を使っている人やテロリスト等の要注意人物を見つけることが可能となり、テロの未然防止に役立つからです。
- Q. 指紋又は顔写真を提供しなかった場合、どのような措置がとられるのですか？
- A. 入国審査官は、その外国人が免除対象者であるか否かについて慎重に審査しますが、外国人が免除対象者でないにも関わらず指紋等の個人識別情報を提供しない場合には、入国は認められず、日本からの退去が命じられます。果たしてほんとうに「テロの未然防止に役立つ

人が辱められることは神の名が損われること——新入国審査について 井田 泉

つ」だろうか。「テロ対策」と称して他国に対して大規模に軍隊を送り込み、罪のないおびただしい人々の血を流させている国、それを支援している日本。こちらこそ巨大なテロ行為ではないのだろうか。

日本で働いているある韓国人司祭はアメリカで講演することが決まっていたのに、指紋と顔写真を取られることを拒み、これをキャンセルした。彼は私にこう言った。「みんなが拒否すべきだとは思わない。でもそういう人がひとりくらいいてもいいのではないか」。彼は、自分の親が亡くなったとき、帰国するかどうか苦しむだろう。

林伯耀氏は「あのいまわしい屈辱感」と述べた。これは小さなことではない。抑圧され、あるいは屈辱を受けた人々に対して忍耐を求め、さらに「人をゆるす」ことを求めるのが信仰的なのだろうか。

かつて預言者エゼキエルをとおして神はこう言われた。

「わたしは熱情と憤りをもって語った。それはお前たちが国々から辱めを受けたからである。それゆえ、主なる神はこう言われる。わたしは手を上げて誓う。必ず、お前の周囲の国々は自分の恥を負う。」（エゼキエル36：6-7）

人が辱めを受けるとき、神は熱情と憤りを起こされるというのである。それは人の受けた屈辱を、神がご自分の受けた屈辱と感じられるからである。

エゼキエルをとおして神は、イスラエルの君候たちの罪についてこう言われた。「父と母はお前の中で軽んじられ、お前の中に住む他国人は虐げられ、孤児や寡婦はお前の中で苦しめられている。お前はわたしの聖なるものをさげすみ、わたしの安息日を汚した。」（22:7-8）

外国人が屈辱を受け、虐げられるとき、神の名は聖とされず、さげすまれ、汚されている。私たちが「み名が聖とされますように」と祈るとき、今、新しい入国審査制度によってこの地で主の名が損われていることに気づきたい。み名のための祈りをとおして、神と人の尊厳を回復したい。

（いだ いずみ 京都聖三一教会牧師）

いるのに、いない ～軽視される外国人住民～

金光 敏

2007年度配布された日本の検定教科書下巻本から「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、国民の税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」という一文が裏表紙に記載されている。

この一文は、教科書無償配布制度が始まって以来、小学校の教科書袋に印刷されていたが、教科書会社と文部科学省が協議し、文部科学省の意向で教科書本体に印刷されることになったという。また、自民党参議院議員で、小泉政権で約10ヶ月間文部科学大臣政務官を務めた有村治子氏が、自らの提案であり、政治活動の成果であるとWebサイトで自画自賛している。

教科書無償配布運動は、1961年高知の被差別部落から始まった。高知市長浜の部落の人々が憲法を学ぶ中、第26条の義務教育無償は権利であることを知った。厳しい困窮でも、子どもにせめて教科書をと闘った。この闘いが1962年の<義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律>につながり、年を追って教科書無償配布が広がっていった。

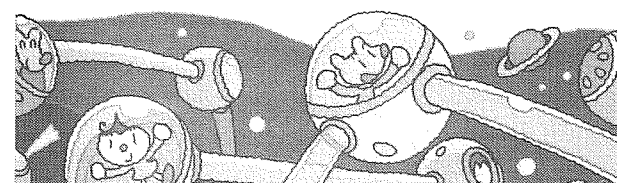
教科書無償配布が始まった頃は、日本全体が貧しく義務教育制度の草創期でもあった。こうした草創期に、「国民の税金」だから「大切に」もわからないわけではない。だが、いまや教科書の無償配布は教育権保障を象徴し、行政責任の基本中の基本として位置付けられている。この期に及んで教科書無償配布は「国民の税金だから」云々というのはいかにも古典的で、時代錯誤もはなはだしい。「国民の税金」で「コンピューター」が無償配布されているのならまだしも。

一方、2007年11月20日から、特別永住者と16歳未満

ISBN4-402-07376-6

C4341 ¥00000E

この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、国民の税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。



教科書の裏表紙に記載されている文言

などを除き、入国するすべての外国人に指紋採取と顔写真撮影が義務付けられることになった。日本が米国に続いて2番目の導入であり、外国人を危険視し、人権を侵害するとして国内外からの批判は強い。この改定出入国管理法はきわめて問題があり、早急な制度改善が必要であるが、私がもっとも問題視するのは、海外修学旅行等の教育旅行時においても外国人生徒から指紋や顔写真の生体情報を取ることで。修学旅行等の教育旅行は、いまや学校教育の主たる学校行事だ。まして文部科学省が提唱して、国際交流活動が活発化、全国の学校が海外訪問を進められてきた。それらの学校の海外研修旅行までもがテロ対策の監視対象とみなされ、外国人ならば、高校生であっても人権を制限し指紋と顔写真を採るといったものだ。

言うまでもないことだが、「国民の税金」という表現は間違っている。外国人も納税者だ。「国民」に「外国人」も含むとするならばそれはそれで外国人の法的地位を日本人同様に扱うべきだ。そのように考えての文言ではない。また、改定入管法を検討する際、法務省は修学旅行等の教育旅行をまったく考慮しなかった。それも仕方がない。学校を所管する文部科学省が、そもそもその認識がないのだから。この法律改定にかかわって日本の学校現場に外国人が在籍しているという認識は示されていない。つまり、日本の学校に外国人生徒がいるという前提がないのだ。

いま記述変更と制度見直しを文部科学省と法務省に要請している。でも、あらためて根の深さを実感するのだが、「在日外国人」はいるのにいないことになっている。いるのにいない。いるのに。

解説：教科書無償配布は1962年から（養護諸学校は1963年）法制化された。教科書の無償化は、日本国憲法に規定された義務教育の根幹的制度とも言える。改定出入国管理及び難民認定法は2006年5月に制定、2007年11月20日から施行された。海外修学旅行が定着した今、旅行団から外国人生徒（特別永住者以外）だけが抽出され、指紋採取と顔写真撮影がされることとなっている。

（きむくあんみん コリアNGOセンター事務局長）

濟州島四・三事件と在日

文京洙

小学校を終えて間もない父が濟州島から大阪にやってきたのは、1920年代の後半の頃だった。いまにして思えば、随分と親不孝な話したが、私は父からも母からも、若かった頃の話をついときいてあげたためしなかった。それでもいつだったか、私の校正中のゲラを懐かしそうに手にしながら、父が戦前のおおの暮らしを語ってくれたことがある。父は、同郷のつてを頼り、おそらく〈君が代丸〉に乗って大阪の地にやって来た。そして最初についた仕事が活字拾いの職工だった。父は、私の前に置かれた朱のびりしり入った校正刷りに半世紀も前の鶴橋での生活を思い浮かべていたのかもしれない。

父が活字拾いをしてきた20年代後半～30年代は、濟州島・大阪間に年に2万～3万人に達する太い人の流れがあり、30年代の半ばには実に島の人口の4分の1が日本にあるという事態となっていた。濟州島と大阪東部は、島の人びとにとってはいわば一つの生活圏であり、父もそういう生活圏のなかを生きて、母と出会った。そしてこの生活圏は、^{キムンジュン}金文準（1893～1936年）をはじめとした濟州島出身の錚々たる社会主義者たちが労働運動や抗日闘争に奔走した空間でもある。彼らは、大阪での労働運動を組織する一方、30年代初めの濟州島社会を揺るがした^{ハニョ}海女たちの抗日闘争や、解放直後の人民委員会、四・三事件の出発点となる三・一節事件（47年）後のゼネストなどを主導した。四・三の武装蜂起に至る濟州島の社会主義運動の源流は、植民地期



第二君が代丸

の大阪に発していた、といっても過言ではない。

解放とともに6万人余りが日本から濟州島に帰り、私の父母もそのなかにいた。だが、深刻な食糧難、コレラ、さらに三・一節事件以後には陸地からやって来た警察や右翼がのさばって一触即発の殺伐とした空気が島の社会をおおった。四・三事件で少年兵として山にこもった^{キムミンジュ}金民柱さんによれば、47年までに3千人余りが日本に舞い戻ったという。そんななかで、そもそも畑仕事の出来る人ではなかった父は、46年には早々と大阪に退散し、翌年には母も父の後を追った。植民地期から解放、四・三事件へと向かう歴史の大河のなかで、まるで木の葉のように漂いながら二人は大阪に舞い戻った。勝手知った大阪への、ちょっとした出稼ぎ気分での密航だったのかもしれない。だが、その後父は1989年に亡くなるまで濟州の土を踏まなかったし、母が故郷に立つまでには半世紀以上の歳月が流れていた。

48年には四・三事件が勃発し、その年の夏以降、濟州島は嚴重な海上封鎖のもとに置かれる。GHQの記録によると48年の日本への密入国は8,408人、49年には9,437人に達している。このうち70%は水際で捕らえられたが、それでも「相当数のKoreanが入国を企図して成功したことは明らかである」とGHQは記録している。このうち、厳しい海上封鎖を突破して日本に逃れた濟州島の人たちも少なくなかったはずである。

南朝鮮労働党の党员として四・三の悲劇のただ中を^{キムシジョン}生きた金時鐘さんは、武装隊がほぼ壊滅状態にあった49年5月半ば、島から30キロ離れた無人島から密航船に乗り込んだ。6月初め、神戸沖に上陸、翌日、鶴橋にたどり着く。島に残した父母への自責や失意にまみれての「在日」としての歩みの始まりであった。

歳月は流れ、今年は事件から60周年を迎える。濟州島だけでなく大阪・東京と犠牲者の慰霊と和解のための集まりが持たれる。

（むん きょんす 立命館大学教授）

韓国・李明博次期政権の行方

鄭雅英

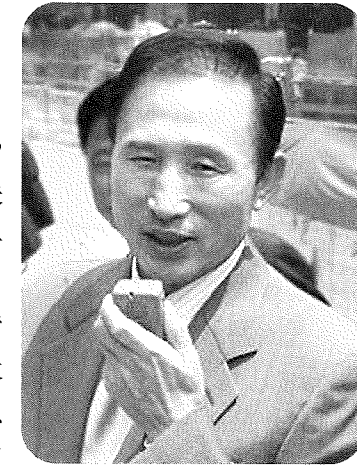
すでに皆さんご存知のように、昨年12月19日に行われた韓国第17代大統領選挙で保守野党ハンナラ党候補・李明博氏が当選しました。得票率は48%を超え、与党候補・鄭東泳氏にダブルスコアをつけての完勝でした。

選挙翌日、10年ぶりの政権交代を伝える韓国の保守系新聞や盧武鉉現政権をお気に召さぬ日本の各メディアは、こぞって歓迎と安堵の意を表明しました。韓日保守メディアの代表格たる朝鮮日報や産経新聞は、見出しの活字が喜びで躍っているように見えましたね。

選挙の一声で一目散に集合離散へと走った与党陣営の選挙戦略失敗もさることながら、与党候補大敗の原因はやはり盧武鉉現大統領に感じた国民の失望をあげなくてはなりません。「参与政権」を自称し弱者に寄り添う政治を標榜したにもかかわらず、盧政権下で韓国社会の経済格差はいっそう拡大し、いまや韓国では就業人口の半数以上が事実上の非正規職に追いやられています。これに不動産高騰による庶民のマイホームの夢崩壊が追い討ちをかけました。ウソかまことか、現政権で急増した民主化運動圏出身の青瓦台（大統領官邸）閣僚のうち、半数は大臣になるまで給与生活を経験したことがなかったのだとか……。成るほどこれではまともな経済政策も期待できぬはず、というのはもっともらしい巷の話ですが、しかし10年前アジア通貨金融危機の直撃を受けて破綻状態にあった国家財政再建と維持に、お決まりの「外資導入」「規制緩和」「雇用の流動化」つまり経済格差拡大を招く一連の「新自由主義」経済政策を打つ以外に、金大中キムデジュン政権も後を継いだ盧武鉉政権も大した選択肢を持たなかったのも事実です。

李明博大統領は大阪市平野の生まれ。幼少時に韓国に帰り、ソウル大学在学時に参加した韓日条

約反対デモで逮捕歴があります。このため就職ができず、思い余って朴正熙大統領（当時）に手紙で直訴したのがきっかけで現代建設に就職、35歳の若さで社長に就任する「神話」を作った後、ソウル市長に転進してソウル中心部を流れるドブ川^{チョングチョン}だった清溪川を強引に長大な親水公園に変貌させて名を馳せたブルドーザー型政治人。韓国版田中角栄といえれば分りやすいでしょうか。大統領選挙中からカネにまつわる怪しげな噂の絶えない所もよく似ていますよね。大統領選の目玉公約が「韓国縦断大運河構想」だなんて、これは



李明博新大統領

はいよいよ角栄節ですが、要は大規模公共投資と「一層の規制緩和」で景気の浮揚を図るという路線であり、これで経済格差を本当に解消できるのか素人目にもいささか不安です。

内政も外交も「理念は引込めて実利優先」を打ち出しています。北朝鮮は沈黙を守っていますが、南北融和政策の拠点だった政府統一部廃止を打ち出した次期政権に向けたピョンヤンの不安げなまなざしが、手に取るようです。逆に「美しい国」の看板を早々に取り外した日本の福田首相は「実利優先」に相性がよさそうです。李明博大統領は「韓日関係で『謝罪』という言葉を使いたくない」と語り日本の「成熟外交」に期待をしていますが、実は盧武鉉前大統領も、就任直後は全く同じフレーズを口にしていたのでした。最後に、われわれ在日にも関わる在外同胞政策を実利一辺倒でやられるとかなわんなあという気はします。在外同胞の国政参政権、ちゃんと考えてほしいのですが。

さて2月の就任以降、新政権のお手並み拝見です。ぼろぼろになった旧与党陣営の再建はなるか、春の国会議員選挙も見ものです。ドラスティックが売り物の韓国政治に、今後も目が離せません。

（ちよん・あよん 立命館大学准教授）

聖公会生野センター

大阪教区後援会より



丹田則史

2005年より聖公会生野センター大阪教区後援会の常任委員を拝命(書記担当)し、各員の皆様より、日々励ましをいただいております。早いもので後援会発足当時よりのメンバーとして変わらず、最も若僧の委員で頑張っています。

(たんだ のりふみ
聖ガブリエル教会信徒)

フォト ギャラリー



いつもの公園で美味しく焼肉、
楽しく韓国舞踊

のりばん

11月は外で楽しく過ごしました。



京都で純和食の日本料理をいただきました。

のりばん ボランティア

一年半前に洗礼、堅信を受け、クリスチャンとして何か、自分にできることはないかと考えていた時、教会で「クリンもだんのボランティア募集」のチラシと出会い、絵にも興味があるので、やってみようと思いました。

石井先生の指導のもと、明るい雰囲気の中みんなが頑張っている姿、また、個性的なすばらしい才能に刺激され、また、いやされています。先生方や若いボランティアの熱心さにも感じています。
(いしかわ ゆきこ 大阪聖愛教会信徒)



受講生の江の口峻史さん 石川由紀子さん



クリスマスメッセージを語る齊藤壺司祭

クリンもだん クリスマス



歌って、踊って楽しく過ごしました

キムジャン大作戦

中村 香

キムチと韓国は切っても切り離すことのできない深い関係で、焼肉がどんなにおいしくても、キムチが無ければ意味がないのである。普通の家では365日、朝昼晩にキムチが食卓に上がらない日は無く、朝からキムチを勧められた日には日本人の私はとてもじゃないけど食べられない。実はキムチを食べるのにはそれなりの気力体力が必要で、平然と食べる韓国人はすごいと思う。韓国と言えばキムチであるが、日本と言えば？昔なら梅干だったのだろうか、今となっては何も思い浮かばないところに、日本の食の崩壊を思うし、キムチの偉大さをも思う。

キムジャンとは、立冬前後に行われる、越冬用のキムチの漬け込み作業、あるいはその時に作られるキムチのことである。もともとキムチは保存食であり、寒さの厳しい韓国は冬に野菜が作れないのである。最後の冬野菜である白菜、大根、ねぎなどの収穫の時期になると、キムジャン大作戦は始まるのであった。

その頃になると挨拶は「キムジャン ハシヨッソヨ？(キムジャンされましたか?)」に変わり、いつどこでどうやるかという話に花が咲く。今年もキムジャンの予定がない我が家は、言い訳に困った。いつもシオモニ(義母)から美味しいキムチをもらっているの、苦労してまずく出来上がるであろうキムチを作ることに虚無を感じるのである。そうは言ってもいつかは作らなければならぬものだし、今年こそはと思っていたが、ご近所さんからのおすそ分けキムジャンキムチがあまりにも多くて断念した。十分越冬できるだけのキムジャンキムチをいただき、置き場所に困っている。

キムジャンは嫁や娘、また近所の人たちとの共同作業で行われる大行事である。今日はこのキムジャン、明日はこのキムジャンと、各家庭を回りながら行われる。今年はお隣さんのキムジャンを手伝った。普通の家では白菜30個程度なのだが、お隣さんは白菜150個に挑戦



キムジャンの風景

である。

キムチ作りは超・重労働である。前日に白菜を塩漬けするのだが、11月の末、すでに十分寒い屋外で、ゴム手袋をはめての作業だ。白菜一枚一枚をめぐりながら塩をすり込んでいく。当日の朝からは白菜に塗りこむ中身、ヤンニョム(たれ)を作る。自家製にんにくはすごく小さくて、根を切ってひとつずつ皮をはいて、たたき潰すのに、3時間はかかった。指ににんにくエキスが染み渡る。細ネギ、わけぎの泥の付いた部分を剥ぎ取っていくには、いよいよ嫌気がさしてくるし、手はにんにく+ネギのにおいで香ばし過ぎだ。午後からは大根40個を細切りにしていくこと3時間。大根細切り工場の機械のようにずばずば切った。オンニ(お姉さん)とオッパ(お兄さん)は、外で塩漬けにした白菜の塩を洗い流し、ぎゅううと絞っている。ゴム手袋をしても外の水は冷たく、中腰の一番つらい作業である。下準備が全部終わると、今度はヤンニョムを混ぜ合わせる。巨大タライに大根、チョンガク大根、ネギ、わけぎ、にんにく、生姜、コチュカル(唐辛子の粉)、魚のエキス、アミの塩辛エキス、からし菜、塩、砂糖、煮詰めたもち米などをいれて混ぜ合わせるのだが、これがまた重い。ふんっふんっ言いながら混ぜ合わせる。分量は各家庭の味、また長年の勘によって決められる。ヤンニョムができあがたらいよいよ本番。白菜一枚一枚の中に、これを入れ込んでいくのだ。外側の葉っぱで全体を包んで、タッパに詰めたら完成。4時間ぶっ通しのマッハですり込み、夜の12時に終了。真っ赤に染まったゴム手袋、服の所々についたヤンニョム、ごちゃごちゃになった台所。後片付けはできないまま、ふらふらしながら家に帰った。すごい感謝された。

韓国人はよく食べる。食文化を大切に作る国だからこそ、農業も日本の状況よりはましだと言える。田舎ではキムチのみならず、お味噌、しょうゆ、コチュジャンなども当たり前のように各家庭で作るのだ。

それにしても韓国人の食に対する執念はすごい。朝昼晩はしっかり食べなくてはならないし、間食も食べる。お酒を飲む人でもご飯はしっかり食べてからお酒を飲むし、つまみも十分食べる。夜中まで飲むとなると、辛ラーメンや焼肉までもが登場する。粗食少食な私は、そんな旦那を尻目に日本風味噌汁とご飯、キムチだけを準備して、プーイングを受ける。そして果てしない夫婦喧嘩に突入するのであった。

来年こそはキムジャンに挑戦しようと思う。しかし隣のオンニ曰く、「来年はもうしない！」であった。

(なかむら かおり 韓国在住)

聖公会生野センターは移転します。



建物外観

1992年から生野区小路東の地で活動を初めて16年。この度聖公会生野センターは移転することになりました。16年間聖ガブリエル教会、こひつじ乳児保育園の三者協働の働きを行ってきました。感謝です。

移転といっても現在の地から南西に歩いて15分の距離です。写真にあるように旧国民団生野東支部を建物ごと借りることになりました。これを実現するために多くの方々の協力があったことは感謝しております。これまでの人と人とのつながりや活動を大切にしながら、新たな地域での働きを展開していきたいと思っております。

新拠点は約32坪の鉄骨一部3階建てです。3月の中旬まで改装工事を行い、3月中には移転することになります。現在のプログラムを継続発展させていながら、新たな活動を模索していきたいと思っております。今後ともよろしくお祈りいたします。

(総主事 吳光現)

新住所：544-0002 大阪市生野区小路3-11-19

聖公会生野センター・付近地図



交通アクセス

- ・地下鉄千日前線「小路」駅4号出口から徒歩10分
- ・近鉄奈良線「今里」駅から徒歩15分



2階のホール

そのときにはもうこれまでのような
言い逃れはできなくなっている

ザイニチ

分断を根拠にした言い分は

理窟の上では力を失い

理窟の力のみを支えにしていた

ザイニチがもしあるとするなら

統一で相殺されるその力では

ザイニチとして立っていることさえも

あやうくなってしまうのだから

帰れ帰れ

国家に帰れ

その強大な理窟の力が

ここぞとばかりに

これまで以上の

腕力で追ってくる

すでもう帰りようのない国家ではなく

また別の在りかを

そのとき見出せているのか

ザイニチ

ユン ドン ジュ 尹東柱『空と風と星と詩』(金時鐘訳・もず工房)

磯貝 治良

尹東柱の詩の魅力とはなんだろう。尹東柱が
人々のなかで生きつづけるのは、なぜだろう。

『空と風と星と詩』がソウルの学生たちのあいだ
で、詩のバイブルのように読まれているという噂
を聞いたのは、20年以上前。延世大学に詩碑が建
てられるよりさきにその計画は日本にも届いた。
日本語では伊吹望訳が影書房から刊行された。

その後も読みつづけられて、魅力
と意味が語られてきた。当然のこと
ながら韓国での研究と論考が活発だ
が、日本でも詩碑が建立されるなど
地道な評価がつづいている。つい先
だって、立教大学で講演・シンポジ
ウムなどからなる集いがあった。韓
国の研究者による協力があったと聞
く。

今回紹介するのは、詩人金時鐘^{キムシジョン}
の訳になる一冊である。詩集『空と風
と星と詩』のほかに13篇の詩が収め
られている。日本語訳にみられる語
法とリズムに詩人金時鐘の表現がか
いまみられ(独自訳が過ぎるとの声もあるが)、そ
こに着目するのも一興だろう。有名な「序詞」に
みると――

死ぬ日まで天を仰ぎ
一点の恥じ入ることもないことを
葉あいにおきる風にすら
私は思いわずらった。
星を歌う心で
すべての絶え入るものをいとおしまねば
そして私に与えられた道を
歩いていかねば。

今夜も星が 風にかすれて泣いている。

好きなあれこれの詩を引用したい誘惑にかられ
るが、手に取って読んでいただくことにして、尹
東柱の詩をめぐる話にふれる。

尹東柱の詩はさまざまな形容で呼ばれてきた。
「抵抗の詩」「抒情詩」「信仰の詩」「いのちの詩」
「自己執着の詩」「耽美の詩」など。そのいずれで
あれ、一種のオマージュ(賞賛)をもって評価さ
れている。

韓国では、その抵抗性のゆえに「国民的詩人」
として遇されてきた。日本でも「抵抗的詩人」と
いうのが定説になっている。日帝時
代に朝鮮語で詩作をつづけ、治安維
持法によって投獄され、解放の日を
みることなくその6カ月前に獄死した
――その経緯が「国民詩人」「抵抗詩
人」を証明して余りあるからだ。

最近、若い研究者や読者のあいだ
に、それらの枠付けに異をとる声
が聞かれる。もっと詩それ自体を
読み解こうという考えだ。筆者の
知人にも、尹東柱の詩にみられる自
己執着や耽美性に着目して「自己解
離」という概念をキーワードにマル
ク・シャガールの絵画との比較論と

いう斬新な試みをしている、在日の若い人がいる。
日帝時代という歴史のくびきから尹東柱の詩を離
陸させようという新しい世代の試みだろう。

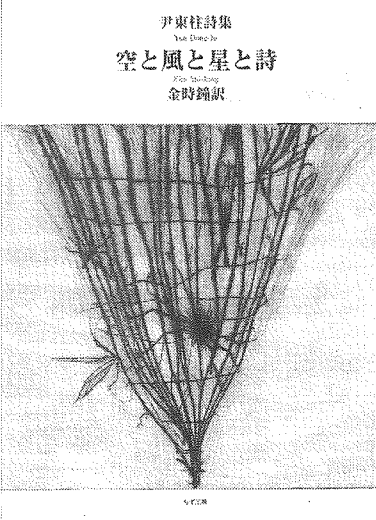
筆者の読み解きは、こうだ。

尹東柱の抒情詩の特質は単なるリリズムでは
ない。詩的モチーフには、ときに「自己愛」ある
いは「自己分裂」と見まちがえるほどの、自己凝
視がある。自己への妥協のなさともいえる。

また、野の草花であれ微かな風であれ、小さな
いのちへのいつくしみ、あるいは「宇宙」への畏
敬が、詩の原質にある。いのちや「宇宙」を損な
う不条理なものへの抗いが、尹東柱の詩を張りつ
めた鋭利な意思となって、世界に向かわせる。

尹東柱が生きた歴史は不条理であった。尹東柱
の詩は、ありのままの姿で抵抗の詩になった。

(いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表)



丁章 (ちよん・ちゃん)

1968年、京都市にて出生

大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業

現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』(新幹社)

詩集『マウムソリ -心の声-』(新幹社)

詩集『闊歩する在日』(新幹社)

大橋 襄

最近、あのドストエフスキーの、あの「カラマーゾフの兄弟」の人気の高いという。私もこれまで何回この小説を読んだかわからない。というのは、この長編小説は筋書きがややこしく、難解で、複雑な人間関係、登場人物の饒舌、そしてそもそもロシア人の人名の難しさのゆえに、読みかけては投げ出し、また読み始めるということを何回も繰り返してきたからである。

この小説の読み方にはいろいろな切り口があるが、いまミステリーとしての面白さが云々されているのは不満だ。私にとってドストエフスキーこそは20世紀の「大預言者」であり、この小説の深いところに流れる主旋律は、あくま

「まことの愛」

で「神」であると思っているからだ。

その中で、ゾシマ長老のさりげない一言が脳裏に刻まれている。「人類を愛する人間は、人を愛せない」という警句だ。「人類愛」とは政治家や自称「慈善家」たちが好んで使いたがる言葉だが、イエスはこうした抽象的な愛ではなく、「隣人愛」を説き、かつ実践した。「まことの愛」は大言壮語のものではなく、目の前にいる人、横に立っている人、名前で呼ばれるべき人への愛でなければならない。

「生野センター」の働きは、ささやかで、目立たず、時に「何をしているのか」と問われることもあるが、この10数年の働きが大言壮語のものでなかったことが嬉しいのである。

(おおはし たかし)

NPO MEMBER'S CARD
入会のお誘い

聖公会生野センターではNPO活動支援の一環として上記クレジットカードの取り扱いをしています。このカードに入会するだけで聖公会生野センターの寄付ができ、利用金額の0.4%が自動的に聖公会生野センターの寄付になります。

詳しくは聖公会生野センターのホームページ又は事務局までお問い合わせください。

余韻

■今年に入って「記憶の継承」というテーマで話をする機会があった。その準備のために、正月に様々な書籍を読んだ。こんな機会がないとなかなか読書・学習ができないのも現実である。その際に、こんな文章にぶち当たった。南京大虐殺の時に幼い子どもと老人が殺される。胸から吹き出る鮮血を吸いながら幼い命を救おうとしたおじいさん。まるでその場にいるかのように体中の血が逆流した。この記憶を南京の人たちは70年経とうとも継承している。■今年も済州島四三事件60周年である。のりばんのハルモニが済州道の招待で現地での慰霊祭に参加することになった。一人ひとりの話を聞いていくと犠牲者の遺族でない人はいなかった。私の伯母は私に「うちの一族で何人死んだか知っているか!」と私に詰め寄る。「誰も教えてくれなかった」という私に「当時は話したら韓国にいる親戚が捕まった」と言う。60年経ってようやく口を開き始めたハルモニたち。私は在日2世としてこの記憶を継承していきたい。そしてそれは戦後「記憶を忙殺」してきた日本社会こそ知っていただきたいことである。(ぴっくあんちゃ)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail: ikuno@nssk.org
http://www.nssk.org/province/ikuno
発行人：宇野 徹
編集人：大橋 襄